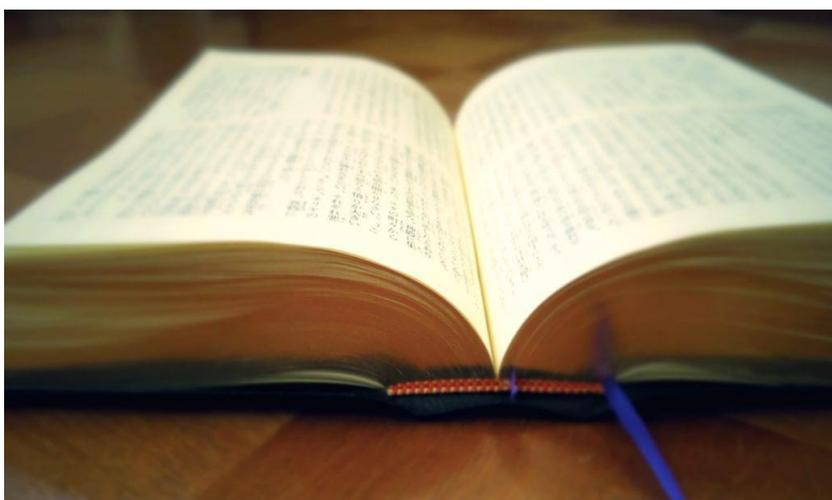


# ダイジェストバイブル



にっぽんせいこうかい

**日本聖公会**

な ら きりすときょうかい

**奈良基督教会**

日本聖公会奈良基督教会では、礼拝の中で日本  
聖書協会が発行している「新共同訳聖書(旧約聖  
書続編つき)」を使用しております。

キリスト教の教会で用いられている聖書は旧約  
聖書が 1502 ページ、新約聖書が 480 ページ、また  
旧約聖書続編が 382 ページで、全部で 2364 ページ  
もあり、どこから読んだらよいのか戸惑われるかも  
しれません。

この「ダイジェストバイブル」では新約聖書の中  
から 12 の箇所を選び、簡単な説明をしています。みな  
さんが聖書に接する、良い機会になれば幸いです。

### ＜聖書とは何ですか＞

古い契約の民にゆだねられた神のみ言葉を書き記  
した旧約聖書と、イエス・キリストによって啓示  
された神の永遠の目的を書き記した新約聖書から  
成っており、救いに必要なすべてのことがここに  
記されています。(祈祷書259頁、教会問答7)

## ① 「幸いな人」

こころ まず ひとびと さいわ  
心の貧しい人々は、幸いである、  
てん くに ひと  
天の国はその人たちのものである。  
かな ひとびと さいわ  
悲しむ人々は、幸いである、  
ひと なぐさ  
その人たちは慰められる。

(マタイによる福音書5章3～4節)

せいしょ こころ まず ひとびと かな ひとびと  
聖書は、「心の貧しい人々」や「悲しむ人々」は  
さいわ つた  
幸いだと伝えます。  
こころ まず ゆた ほう かな  
心が貧しいよりも豊かな方がいい、悲しいより  
たの おも ふつう  
も楽しいほうがいいと思うのが普通です。しかし  
せいしょ はんたい い  
聖書はそれとまったく反対のことを言っています。  
どういうことでしょうか。

こころ かわ かな  
それは心がカラカラに乾いてしまったとき、悲  
しみの中で前を向くことができなくなってしまっ  
たとき、じぶん ちから ある かみ たよ  
自分の力で歩けず神さまに頼るしかない、  
そのようなときにこそ、かみ かん  
神さまのぬくもりを感じ  
ることができるからです。

## ② 「天に富を積みなさい」

あなたがたは地上に富を積んではならない。  
そこでは虫が食ったりさび付いたりするし、  
また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。  
富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食う  
ことも、さび付くこともなく、また、盗人が  
忍び込むことも盗み出すこともない。

(マタイによる福音書6章 19～20節)

わたしたち人間は、お金や名誉など、この世の富  
や栄光を追い求めます。

しかしわたしたちが天に召される時には、  
地上の富を何一つ持っていくことはできません。

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろ  
う。」(旧約聖書ヨブ記1章 21節) というのが現実  
なのです。

わたしたちは神さまの前に富を積むことができ  
ているのでしょうか。

### ③ 「一匹の羊」

あなたがたはどう思うか。ある人が羊を  
百匹持っていて、その一匹が迷い出たとす  
れば、九十九匹を山に残しておいて、迷い  
出た一匹を捜しに行かないだろうか。  
はっきり言うておくが、もし、それを見つけ  
たら、迷わずにいた九十九匹より、その  
一匹のことを喜ぶだろう。

(マタイによる福音書18章12～13節)

羊は弱い動物です。羊飼いがいなければ、野獣  
や強盗に襲われたり、道に迷ってオアシスにたど  
り着けなかつたりします。

わたしたちも同じです。

わたしたちは弱く、いつも迷い、そして恐れの中  
で生きています。しかし神さまは小さなたった  
一匹の羊を大切にするように、わたしたち一人ひ  
とりのことも大切にしてくださるのです。

#### ④ 「罪人を招くため」

イエスはこれを聞いて言われた。「<sup>い</sup>医者<sup>いしや</sup>を必要とするのは、<sup>じょうぶ</sup>丈夫な人ではなく、<sup>びょうにん</sup>病人である。わたしが来たのは、<sup>ただ</sup>正しい人<sup>ひと</sup>を招くためではなく、<sup>つみびと</sup>罪人を招くためである。」

(マルコによる福音書2章17節)

<sup>かみ</sup>神さまは<sup>たいせつ</sup>大切な<sup>ひと</sup>ひとり子<sup>ご</sup>であるイエス様をこの世にお遣わしになりました。

それは<sup>じぶん</sup>自分の<sup>ちから</sup>力<sup>い</sup>だけで生きていける人<sup>ひと</sup>を助けるためではありません。

<sup>びょうにん</sup>病人のように<sup>よわ</sup>弱り果て、<sup>は</sup>罪人<sup>つみびと</sup>のように<sup>ふしょうじき</sup>不正直なわたしたち一人<sup>ひとり</sup>ひとりが<sup>かみ</sup>神さまの<sup>まえ</sup>前に立つことができるように、<sup>かみ</sup>神さまはイエス様をわたしたちの<sup>あいだ</sup>間に<sup>つか</sup>遣わされたのです。

イエス様の<sup>さま</sup>十字架<sup>じゅうじか</sup>の<sup>ち</sup>血<sup>ち</sup>によってわたしたちの<sup>つみ</sup>罪は<sup>あがな</sup>贖<sup>かんぜん</sup>われました。完全な人間<sup>にんげん</sup>ではないからこそ、イエス様が<sup>さま</sup>必要な<sup>ひつよう</sup>のです。

## ⑤ 「自分の十字架を背負って」

それから、<sup>ぐんしゅう</sup>群衆を<sup>でし</sup>弟子たちと<sup>とも</sup>共に<sup>よ</sup>呼び<sup>よ</sup>寄せ  
て<sup>い</sup>言われた。「わたしの<sup>あと</sup>後に<sup>したが</sup>従<sup>もの</sup>たい者は、  
自分<sup>じぶん</sup>を<sup>す</sup>捨て、<sup>じぶん</sup>自分の<sup>じゅうじか</sup>十字架を<sup>せ</sup>背負<sup>お</sup>って、わた  
しに<sup>したが</sup>従<sup>したが</sup>いなさい。  
自分<sup>じぶん</sup>の<sup>いのち</sup>命を<sup>すく</sup>救<sup>おも</sup>いたいと思<sup>もの</sup>う者<sup>うしな</sup>は、それを<sup>うしな</sup>失  
うが、わたしの<sup>ふくいん</sup>ため、また<sup>いのち</sup>福音<sup>いのち</sup>のために<sup>いのち</sup>命<sup>いのち</sup>を  
失<sup>うしな</sup>う者<sup>もの</sup>は、それを<sup>すく</sup>救<sup>すく</sup>うのである。

(マルコによる<sup>ふくいんしょ</sup>福音書<sup>しょう</sup>8章<sup>せつ</sup>34～35節)

<sup>じぶん</sup>自分を<sup>す</sup>捨てるとは、<sup>じぶん</sup>どういう<sup>おも</sup>こと<sup>ゆうせん</sup>で<sup>あとまわ</sup>しょうか。そ  
れは<sup>じぶん</sup>自分の<sup>おも</sup>思いを<sup>ゆうせん</sup>優先<sup>あとまわ</sup>せずに、<sup>あとまわ</sup>後回<sup>あとまわ</sup>しにするとい  
う<sup>う</sup>こと<sup>う</sup>です。

<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>さまの<sup>こころ</sup>み<sup>なん</sup>心<sup>かみ</sup>は何<sup>かみ</sup>だ<sup>かみ</sup>ら<sup>かみ</sup>うか。神<sup>かみ</sup>さまは<sup>かみ</sup>わた<sup>かみ</sup>した  
ち<sup>かみ</sup>に<sup>かみ</sup>ど<sup>かみ</sup>の<sup>かみ</sup>よ<sup>かみ</sup>う<sup>かみ</sup>に<sup>かみ</sup>歩<sup>かみ</sup>んで<sup>かみ</sup>欲<sup>かみ</sup>しい<sup>かみ</sup>と思<sup>かみ</sup>われ<sup>かみ</sup>て<sup>かみ</sup>い<sup>かみ</sup>る<sup>かみ</sup>の<sup>かみ</sup>か。  
<sup>た</sup>立ち<sup>た</sup>止<sup>た</sup>ま<sup>た</sup>って<sup>た</sup>考<sup>た</sup>えて<sup>た</sup>み<sup>た</sup>ま<sup>た</sup>し<sup>た</sup>ょう。

<sup>じぶん</sup>自分<sup>じぶん</sup>勝<sup>じぶん</sup>手<sup>じぶん</sup>に<sup>じぶん</sup>生<sup>じぶん</sup>きる<sup>じぶん</sup>の<sup>じぶん</sup>では<sup>じぶん</sup>なく、<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>さま<sup>かみ</sup>の<sup>かみ</sup>み<sup>かみ</sup>手<sup>かみ</sup>の  
<sup>なか</sup>中<sup>なか</sup>に<sup>なか</sup>い<sup>なか</sup>る<sup>なか</sup>こ<sup>なか</sup>と<sup>なか</sup>を<sup>なか</sup>感<sup>なか</sup>じ<sup>なか</sup>な<sup>なか</sup>が<sup>なか</sup>ら<sup>なか</sup>生<sup>なか</sup>きて<sup>なか</sup>み<sup>なか</sup>ま<sup>なか</sup>し<sup>なか</sup>ょう。

## ⑥ 「一番偉い人」

しかし、あなたがたの間<sup>あいだ</sup>では、そうではない。  
あなたがたの中<sup>なか</sup>で偉<sup>えら</sup>くなり<sup>もの</sup>たい者は、皆<sup>みな</sup>に仕<sup>つか</sup>  
える者<sup>もの</sup>になり、いちばん上<sup>うえ</sup>になり<sup>もの</sup>たい者は、  
すべての人<sup>ひと</sup>の僕<sup>しもべ</sup>になりなさい。

(マルコによる福音書10章43～44節)

このころイエス様<sup>さま</sup>の周り<sup>まわ</sup>には、長い衣<sup>なが</sup>をま<sup>ころも</sup>とつ  
て歩<sup>ある</sup>き回<sup>まわ</sup>り、広場<sup>ひろば</sup>で挨拶<sup>あいさつ</sup>されること<sup>かいどう</sup>や、会堂<sup>かいどう</sup>では  
上席<sup>じょうせき</sup>、宴会<sup>えんかい</sup>では上座<sup>じょうざ</sup>に座<sup>すわ</sup>ることを望<sup>のぞ</sup>んでい<sup>ひと</sup>る人<sup>ひと</sup>  
たちがいました。彼<sup>かれ</sup>らは人々<sup>ひとびと</sup>に「偉<sup>えら</sup>い」と思<sup>おも</sup>われた<sup>かんが</sup>  
いと考<sup>かんが</sup>えていました。

わたしたちにも、そのような思<sup>おも</sup>いがあるかもし  
れません。人<sup>ひと</sup>の目<sup>め</sup>を気<sup>き</sup>にし、人<sup>ひと</sup>より優位<sup>ゆうい</sup>に立<sup>た</sup>ちたい  
という気持<sup>きもち</sup>ちもあるでしょう。

しかしイエス様<sup>さま</sup>は「仕<sup>つか</sup>える者<sup>もの</sup>になりなさい」と命<sup>めい</sup>  
じられます。誰<sup>だれ</sup>かのため<sup>じぶん</sup>に自分<sup>じぶん</sup>ができることを、  
見返<sup>みかえ</sup>りを求<sup>もと</sup>めずにおこなう。それが僕<sup>しもべ</sup>です。

## ⑦ 「羊飼いと天使」

その<sup>ちほう</sup>地方で<sup>ひつじか</sup>羊飼<sup>のじゆく</sup>いた<sup>の</sup>ち<sup>が</sup>が<sup>を</sup>野<sup>を</sup>宿<sup>を</sup>を<sup>し</sup>な<sup>が</sup>ら、  
夜<sup>よ</sup>通<sup>ど</sup>し<sup>お</sup>羊<sup>ひつじ</sup>の<sup>む</sup>群<sup>む</sup>れの<sup>ばん</sup>番<sup>を</sup>を<sup>し</sup>て<sup>い</sup>た。  
す<sup>と</sup>と、主<sup>しゆ</sup>の<sup>てんし</sup>天<sup>ちか</sup>使<sup>しゆ</sup>が<sup>えいこう</sup>近<sup>まわ</sup>づ<sup>き</sup>き、主<sup>を</sup>の<sup>えいこう</sup>栄<sup>が</sup>光<sup>まわ</sup>が<sup>まわ</sup>り  
を<sup>て</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>し</sup>た<sup>た</sup>の<sup>で</sup>、彼<sup>かれ</sup>ら<sup>は</sup>は<sup>ひじょう</sup>非<sup>おそ</sup>常<sup>おそ</sup>に<sup>おそ</sup>恐<sup>おそ</sup>れ<sup>た</sup>た。

(ルカによる<sup>ふくいんしょ</sup>福<sup>しょう</sup>音<sup>せつ</sup>書<sup>せつ</sup>2章8~9節)

これはクリスマス物<sup>ものがたり</sup>語<sup>いちばめん</sup>の一<sup>の</sup>場<sup>の</sup>面<sup>です</sup>です。クリスマス  
ス<sup>せいげき</sup>ペ<sup>おも</sup>ー<sup>だ</sup>ジ<sup>ひと</sup>ェ<sup>ひと</sup>ン<sup>ひと</sup>ト(聖<sup>せい</sup>劇<sup>げき</sup>)を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>い<sup>だ</sup>出<sup>だ</sup>す<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>る</sup>る<sup>で</sup>  
し<sup>し</sup>ょう<sup>しょう</sup>。

神<sup>かみ</sup>さ<sup>かみ</sup>ま<sup>かみ</sup>は<sup>かみ</sup>イ<sup>かみ</sup>エ<sup>かみ</sup>ス<sup>かみ</sup>様<sup>かみ</sup>の<sup>かみ</sup>誕<sup>かみ</sup>生<sup>かみ</sup>を<sup>かみ</sup>、真<sup>ま</sup>っ<sup>ま</sup>先<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>羊<sup>ま</sup>飼<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>  
知<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>せ<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>した。彼<sup>かれ</sup>ら<sup>は</sup>は<sup>か</sup>貧<sup>か</sup>しく、人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>か<sup>びと</sup>ら<sup>びと</sup>は<sup>びと</sup>差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>さ<sup>べつ</sup>れ<sup>さ</sup>  
て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た。

し<sup>か</sup>し<sup>か</sup>神<sup>かみ</sup>さ<sup>かみ</sup>ま<sup>かみ</sup>は<sup>かみ</sup>王<sup>おう</sup>様<sup>さま</sup>や<sup>しん</sup>神<sup>しん</sup>殿<sup>でん</sup>の<sup>え</sup>偉<sup>え</sup>い<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>た<sup>ひと</sup>ち<sup>ひと</sup>で<sup>ひと</sup>は<sup>ひと</sup>な<sup>ひと</sup>く、  
「神<sup>かみ</sup>さ<sup>かみ</sup>ま<sup>かみ</sup>に<sup>かみ</sup>見<sup>み</sup>捨<sup>す</sup>て<sup>す</sup>ら<sup>す</sup>れ<sup>す</sup>た」と<sup>お</sup>思<sup>おも</sup>わ<sup>おも</sup>れ<sup>おも</sup>て<sup>おも</sup>い<sup>おも</sup>た<sup>おも</sup>人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>  
に<sup>め</sup>目<sup>め</sup>を<sup>む</sup>向<sup>む</sup>け<sup>む</sup>ら<sup>む</sup>れ<sup>む</sup>た<sup>む</sup>の<sup>む</sup>で<sup>む</sup>す。

神<sup>かみ</sup>さ<sup>かみ</sup>ま<sup>かみ</sup>の<sup>かみ</sup>救<sup>すく</sup>い<sup>すく</sup>の<sup>よ</sup>喜<sup>よろこ</sup>び<sup>し</sup>の<sup>し</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>せ<sup>し</sup>は、わ<sup>わ</sup>た<sup>わ</sup>し<sup>わ</sup>た<sup>わ</sup>ち<sup>わ</sup>の<sup>わ</sup>  
元<sup>もと</sup>に<sup>もと</sup>も<sup>もと</sup>必<sup>かな</sup>ず<sup>かな</sup>届<sup>とど</sup>け<sup>とど</sup>け<sup>とど</sup>ら<sup>とど</sup>れ<sup>とど</sup>ま<sup>とど</sup>す。

## ⑧ 「罪を犯したことの無い者」

しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。

(ヨハネによる福音書8章7～8節)

あるとき人々が、罪を犯してしまった女性をイエス様の元に連れて来て言います。「この女は罪を犯したんだ。だから裁いてくれ」と。そのときにイエス様が言われたのが、上の言葉です。

わたしたちは誰一人として、神さまの前に完全に正しい者ではありません。思いや言葉や行いによって、人を傷つけ、神さまを悲しませている存在です。

わたしたちが人を裁くことなどできないのです。

## ⑨ 「互いに愛し合いなさい」

わたしがあなたがたを愛したように、互いに  
愛し合いなさい。これがわたしの掟である。  
友のために自分の命を捨てること、これ  
以上に大きな愛はない。

(ヨハネによる福音書15章 12～13節)

聖書が伝える愛とは、無償で与えられるもので  
あり、見返りをまったく求めないものです。ただ  
だ一方的に与えられる、それが聖書の愛です。

イエス様はわたしたちをまず愛してくださいま  
した。その愛の形が、十字架による贖いです。わ  
たしたちを救うために、ご自分の命を捨てられた  
のです。

その大きな愛に包まれているから、わたしたち  
も人を愛することができるのです。神さまから受  
けた愛のほんの少しだけでも、隣の人と分かち合  
うことができたらと思います。

## ⑩ 「共に喜び、共に泣く」

よろこ ひと とも よろこ な ひと とも な  
喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

たが おも ひと たか みぶん ひく  
互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。

(ローマの信徒への手紙 12 章 15～16節)

ここに書かれていることは、当たり前のようになかなか難しいことです。喜ぶ人を見たら妬んでしまったり、泣く人がいたら追い打ちをかけたります。そのようなことはないでしょうか。

イエス様は「わたしは世の終わりまで、いつもあなたと共にいる。」(マタイによる福音書28章20節)と約束されました。それはわたしたちの重荷を共に担ってくださるためです。

イエス様が共に歩んでくださるから、わたしたちもまた隣にいる人と共に歩んでいけるのです。

## ⑪ 「目には見えないもの」

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

(コリントの信徒への手紙二4章18節)

わたしたちはどのような価値観を持っているでしょうか。お金や地位、服装や職業、学歴や容姿など、「見た目」を大事にする方も多いと思います。実際この世の中を生きていく上で、それらをすべて無視するのは難しいのかもしれませんが。

しかし、「見えないもの」も大切にしていきたいと思うのです。神さまの愛や信仰、人との絆や思いやりなども、「見えないもの」に含まれるかもしれません。

神さまはわたしたちを愛してくださっている。見えないけれども、信じていきましょう。

## ⑫ 「神さまの愛」

かみ ひと ご よ つか  
神は、独り子を世にお遣わしになりましたそ  
かた  
の方によって、わたしたちが生きるようにな  
い  
るためです。ここに、神の愛がわたしたちの  
かみ あい  
うち しめ  
内に示されました。

かみ あい  
わたしたちが神を愛したのではなく、神がわ  
かみ  
たしたちを愛して、わたしたちの罪を償う  
あい つみ つぐな  
いけにえとして、御子をお遣わしになりまし  
み こ つか  
た。ここに愛があります。

てが みいち しょう せつ  
(ヨハネの手紙一4章9～10節)

せいしょ  
聖書のメッセージは、「神さまはわたしたちを愛  
かみ  
しておられる」、このことに尽きます。そのために  
つ  
イエス様を遣わされ、十字架の死によって罪の贖  
さま つか じゅうじか し つみ あがな  
いとされました。そして聖霊を送り、わたしたちが  
せいれい おく  
あゆ よう みちび  
歩んでいける様に導いてくださいます。

かみ  
わたしたちは神さまの愛によって生かされてい  
い  
ます。そのことを決して忘れないでください。  
けつ わす

「<sup>せいしよ</sup>聖書は<sup>かみ</sup>神さまからのラブレター」だといわれ  
ます。これまでも<sup>おお</sup>多くの<sup>ひと</sup>人が<sup>せいしよ</sup>聖書によって<sup>い</sup>生き方  
を<sup>か</sup>変えられ、<sup>すす</sup>進むべき<sup>みち</sup>道を与えられてきました。

もっと<sup>せいしよ</sup>聖書を読みたいという方は、お申し出く  
ださい。<sup>せいしよ</sup>聖書<sup>わた</sup>カタログをお渡ししますので、<sup>きぼう</sup>ご希望  
の<sup>せいしよ</sup>聖書をご<sup>こうにゆう</sup>購入ください。（<sup>と</sup>お取り<sup>よ</sup>寄せには  
<sup>にしゅうかん</sup>二週間ほどかかる<sup>ばあい</sup>場合があります。）

また<sup>こがた</sup>小型の<sup>しんやくせいしよ</sup>新約聖書「<sup>せいしよ</sup>レインボー聖書」、および  
<sup>にほんこくさい</sup>日本国際ギデオン<sup>きょうかいはっこう</sup>協会発行の「<sup>しんやくせいしよ</sup>新約聖書」は<sup>むりよう</sup>無料  
で<sup>わた</sup>お渡しできます。<sup>きぼう</sup>ご希望の方は<sup>かた</sup>ご遠慮なく<sup>えんりよ</sup>おっ  
しゃってください。

<sup>かみ</sup>神さまからのメッセージが

あなたの<sup>もと</sup>元に<sup>とど</sup>届けられますように

<sup>れいはいようしよ</sup>＜礼拝用書のご案内＞<sup>あんない</sup>

にっぽんせいこうかいきとうしよ  
日本聖公会祈祷書 2,563 円（税込）

にっぽんせいこうかいせいかしゅう  
日本聖公会聖歌集（赤・青） 3,142 円（税込）

